倫風宏話

「生きる力」を与えてくれる音楽

上廣哲治

年末恒例の音楽イベントといえば、ベートーベンの「第九（交響曲第九番）」、とりわけ第四楽章の「歓喜の歌」の大合唱を思い浮かべる人も多いでしょう。昨年はベートーベンの生誕二五〇周年にあたり、クラシック音楽界はこのイベントを中心に大いに盛り上がるはずでした。ところが、コロナ禍によって多くのコンサートが中止になったり、これまでとは異なるかたちでの開催を余儀なくされました。

毎年十二月に大阪城ホールで行われている「サントリー1万人の第九」も、異例の開催方法をとりました。いつもなら、公募などによって選ばれた一万人規模の大合唱団が、オーケストラや観客のいるアリーナを取り囲み、圧倒的な歌声が会場に響きわたるところでしたが、昨年は合唱参加者や観客の入場を断念。投稿された一万本余りの歌唱動画をホール内の大スクリーンに映し出し、佐渡裕さんが指揮するオーケストラや声楽家たちとのコラボレーションを動画配信したのです。

長いあいだ続けてきたコンサートを途切れさせないために、どのような方法で開催するのが最良なのか。佐渡さんをはじめ、関係者が知恵を絞り合って出した結論が、右のような「リモート」の応用でした。テーマとして掲げられたのは、「つながろう、今」。そこには、コロナ禍によってさまざまな関係が分断されている今だからこそ、人と人とのつながりを大切にしようという思いがこめられていました。

この原稿を書いている今、年末の風物詩でもある各地の「第九」が、どのようなかたちで開催されるのか予測することはできません。とはいえ、「1万人の第九」のように大規模な合唱団が会場を埋めつくす光景は、今年も見ることができないでしょう。

コロナ禍のなかで私たちが求められてきたのは、「三密」の回避であり、対人距離を十分にとることでした。ところが皮肉なことに、舞台上のオーケストラにしても合唱団にしても、ベートーベンの「第九」ほど「密」であることを要求し、「密」によって成り立っているクラシック音楽はないのです。

第四楽章の合唱曲「歓喜の歌」は、時の流れのなかで分け隔てられていた人々が再び結ばれ、友愛の絆を結ぶ喜びを表した歌です。高らかに歌い上げられる「抱き合おう、幾百万の人々よ！　この口づけを、世界中に！」という一節は、しばしば世界平和への願いを表すとも、近代民主主義の勝利を暗示するとも言われてきました。音楽学者の岡田暁生さんは、「第九」が表そうとしたこの理念が、コロナ禍のなかで空洞化してしまっている状況を次のように記しています。

「ステージにところ狭しと合唱団やオーケストラ・メンバーを並べることで得られる圧倒的な響きの密度は、単なる音響効果にとどまらず、世界中の人々が抱き合うという友愛理念の可聴化にほかならないのである。しかるに衛生上の理由から合唱メンバー間にシールドを立てたりしたら何が起きるか？『抱き合え』と歌っているのに、歌手同士はお互いよそよそしく、いつまでたっても距離を縮めようとしないという、ブラックジョークのような光景が出現するはずであろう。（中略）今やこの高邁な理念

は衛生学の前に屈し、『感染リスクの高い行為』のレッテルを貼られた」（『音楽の危機』）

「感染リスクの高い行為」のレッテルを貼られたのは、「第九」やクラシック音楽に限りません。ライブハウスや野外ライブなどを主舞台とするジャズやロックは、いっそう冷たい視線にさらされることになったのです。音楽関係者は多くの仕事を失い、生活の基盤さえ失う状況に陥ってしまいました。

岡田さんは、「コロナ禍がもたらした最大の災いは、『空気の共有』に対する全世界の人々の忌避感である」（前掲書）と言います。ところが音楽とは、そもそも「空気振動をリアルタイムで共有する芸術形式」であり、むしろ人と人との距離感を縮めるためにこそ存在してきたのであって、空気を共有するがゆえにあの熱狂や一体感が生まれるというのです。

このように書くと、「空気を共有しなくても、CDなどで音楽を聴くことができる」と反論する人もいるでしょう。岡田さんによれば、音楽には「ライブ音楽」と「メディア音楽」の二種類があり、空気を共有するのが前者、CDなどで聴くのは後者ということになります。卑近な例でいえば、友達と酒場でお酒を飲むのと、オンラインで「飲み会」をすることの違いと言ったらいいでしょうか。

じつは私自身も今年、コロナ前にはあまり意識しなかった二種類の音楽の違いを強く感じる経験をしました。学生時代にCDなどを通してファンになった、あるアーティストのコンサートに出かけたときのことです。それまでは、曲調が好きだったり、歌の内容に共感を覚えたりといったレベルでしたが、ライブ会場で実際の音に触れ、ファン同士が距離感を縮めて同じ空気のなかに入ったときの感動は、「メディア音楽」とは比較にならない衝撃的なものでした。魂を揺さぶられるとともに、音楽が心をつなぎ、言葉がなくても歌で会話ができることを実感しました。音楽は私に、「生きる喜び」だけではなく「生きる力」を与えてくれていたし、それが生きる支えとなっていたことに気づかされたのです。

同じことは、『アメイジング・グレイス／アレサ・フランクリン』というドキュメンタリー映画を観たときにも感じました。アレサ・フランクリンといえば、圧倒的な歌唱力で「ソウルの女王」と呼ばれ、ジャンルを超えて多くの人に崇敬された歌手です。一九七二年、ロサンゼルスの小さな教会で、彼女の歌の原点でもあるゴスペル（アフリカ系アメリカ人によって歌われてきた教会音楽）のコンサートが、二百人ほどの観客を集めて開かれました。そのときの映像が、約半世紀ぶりに公開されたのです。

ライブ映像を観ることは、先ほどの分類でいえばメディア音楽の部類に入るのでしょう。しかし、そこに映し出された光景は、「三密」そのものの会場の空気を十分に感じさせてくれるものでした。天をつくようなアレサの声に興奮して立ち上がる人々、泣き出す合唱隊のメンバー、通路で踊り始める人、失神して抱きかかえられる人……。まさにミュージシャンと観客（むしろ参加者と呼んだほうがいいかもしれません）が一体となり、濃密な空気を共有する素晴らしさを実感することができたのです。

この二年間、私たちは「密」になることを避けてきましたし、まだ当分は避けざるを得ないでしょう。命を守るには、なにより万全な感染対策が必要です。ただ、それでも皆さんに忘れないでいてほしいのは、人が寄り添うことの大切さであり、その場でこそ成り立つ豊かさがあるということです。それは決して「不要不急」のものではなく、私たちに生きる力や勇気を与えてくれる大切なものなのです。

イヤホン越しに音楽を楽しむのも、環境音楽に聴き入るのも結構ですが、できれば一度ライブ会場に足を運んで、同じ空気を共有し、感動を分かち合ってみてはいかがでしょう。そして、私たちの会場もそのような、寄り添うことの喜びと生きる力にあふれた場にしていかなければと思うのです。